

令和4年度第2回徳島県総合教育会議・第1回徳島県教育振興審議会 会議録

日時：令和4年12月14日（水）14：00～16：00

場所：徳島グランヴィリオホテル

（司会進行）

<村山部長>

本日はお忙しいところ、御参加いただきありがとうございます。只今から令和4年度第2回徳島県総合教育会議及び第1回徳島県教育振興審議会を開催いたします。今回は次期「徳島教育大綱」及び次期「徳島県教育振興計画」が令和5年度において同時に作成されますことを鑑みまして、より一層の連携強化を図るため、合同での開催とさせていただきます。

なお、本日は席上にお配りしています名簿のとおり御出席いただきまして、教育振興審議会の佐古会長、金西委員、松木委員、松本委員におかれましては、本日所用により欠席されております。また、教育振興審議会の泰山委員におかれましては、所用により15時15分頃に御退席される予定となっております。それでは、まずはじめに飯泉知事より御挨拶申し上げます。

（あいさつ）

<飯泉知事>

本日は令和4年度第2回目となります徳島県総合教育会議と、第1回目となります徳島県教育振興審議会を同時開催させていただきましたところ、教育委員の皆さん、あるいはそれぞれの審議会の委員の皆様方には大変お忙しい中、また大変寒い中、御出席を賜り、誠にありがとうございます。

さて、平成27年度に徳島県総合教育会議を開催をさせていただきました、国の方で方向を出しました教育大綱を定めることとなりました。そして本県の教育、学術、文化、スポーツ、その指針にということで、しかも教育振興計画につきましては、徳島県教育振興審議会の皆様方の審議をいただきまして、こちらもしたためたところでもあります。そして教育大綱は4年、振興計画は5年とそれぞれ時期が少し違っているわけですが、今年がちょうどその最終年次と言うことでピタリと軌を一にすることとなりました。そこで今後のポストコロナ新時代を踏まえた、新たな教育のあり方、あるいは文化、スポーツのあり方、学術のあり方、こうした点を皆様方にぜひ御審議をいただき、そして今国におきましても次期計画の検討が進んでいるところでもありますので、国あるいは県の情勢を皆様方にまずは御提供させていただきました、そして本県の教育大綱、あるいは振興計画、どのような形で未来志向、掴み取ることができるのか。その御審議をお願いをしたい。そういった意味で、合同での今日は会議とさせていただいたところでもありますので、ぜひ皆様方にはこうした流れといったもの、あるいは軌を一にしたといった点をお踏まえをいただきまして、未来志向に則ったさまざまな御意見賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。それでは本日の会議よろしくお願いたします。

<村山部長>

それでは議事に移ってまいります。これからの議事進行については飯泉知事をお願いいたします。

<飯泉知事>

それでは議事を進めさせていただきます。皆様方には円滑な議事進行に御理解と御協力方、どうぞよろしくお願いをいたします。本日のテーマであります次期「徳島教育大綱」並びに次期「徳島県教育振興計画」の策定についてということでもありますので、まずは事務局の方から御説明を申し上げさせていただきます、そして皆様方からの御意見を頂戴をできればと考えております。それでは事務局から説明をお願いいたします。

<事務局>

事務局より「資料1」に基づき、概要説明。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは議事の(2)意見交換に移って参ります。それではまず教育振興審議会の委員の皆様から御意見を頂戴したいと思います。それでは泰山委員さん、よろしくお願いをいたします。

(意見交換)

<泰山委員>

鳴門教育大学の泰山と申します。よろしくお願いをいたします。私の方からは、教育DXについて、今の現状や方向性についてちょっと意見を述べさせていただきます。ここに書かれているとおり、DX、デジタルトランスフォーメーションについて、何がトランスフォームするのかっていう話が日本全国で議論されていて、今までの授業の在り方がそのままデジタルに置き換わるってわけではもちろんないということですね。GIGAスクール構想が成功している自治体を見ていると、やはり学力の捉え方がトランスフォームした時に、授業の在り方が変わったり、教育の在り方が変わっていく様子が多く見受けられます。

一方で、例えば、いろんな地域で、いろんな学校にお邪魔する機会があるんですけども、ICTが入って授業を変えていこうという話をした時に、よく言われるのが、「とはいえ入試が」、「とはいえ学力が」という話で、そういうような改革が進んでいかないということがよく見受けられるというのが現状だと認識しています。

一番大きいのは、入試というような一つの出口が一番大きく影響しているのではないかと思うんですけども、例えば、入試改革というようなことを含めて、DXを捉えられないか、現行の学習指導要領で起きていることは、大学入試改革を含めて学習指導要領を変えるということが行われているわけですけども、県単位でいうと高校の入試であったり、学力の位置づけみたいなことも含めたDXが、かなり具体的に明記されるということがおそらく必要で、結局DXしようと言われても、変えられないことがあるという前提だと先生方も疲弊するということがありますので、ぜひそのあたりのところを御検討いただ

きたい。あともう一つは、それぞれの学校の裁量をどれくらい大きくするのかということも課題になってきていると思いますので、例えばですけれども、神山まるごと高専ですとか日本中から着目されているところで、そのような地域の特色とか、徳島に来ると、こういうような学力を大事にした教育を受けられるのだという方向性が示されていくと、おそらく日本全国から着目され、そういう教育を受けるために徳島に来る方もいらっしゃるのではないかと思いますので、そういうような学力の意味を変える、デジタルに限らず教育の改革を具体的に示していくことを盛り込んでいく必要があるのではないかと考えているところです。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。DXはあくまでも手法ということで、その出口である入試改革であるとか教育、こここのところにしっかり着眼したものを書くべきであるとの御提言いただきました。ありがとうございました。それでは青木副会長さんよろしく申し上げます。

<青木委員>

医療法人新心会の青木でございます。よろしくお願ひいたします。私の方から2点だけ申し上げます。その前にやはり事務局から御説明のありました次期大綱と教育振興計画の策定の方針の中にありましたパッケージ化という視点、これは新しくて非常にわかりやすい。一体的な施策体系の構築で徳島ならではの未来教育を創造するという、これは非常にいいのではないかと考えております。それでは2点だけ言わせていただきます。

まず、1点目でございますが、策定するに当たって、地方では、地方創生、少子高齢化、人口減少といった課題に直面しております。その中で、今まで学校教育は地域に開かれた学校教育という視点だったと考えております。今後は、地域とともにある学校教育、つまり創造性豊かな施策、地域と一緒に創っていくのだという視点、現在の計画の中では、3番に属すると思いますが、地域や家庭とともに学び、支え合う社会の創造といった視点がこれからの徳島にとって一番大事だろうと考えております。

もう1点は、関西広域連合協議会委員でございますので、やはり2025年大阪・関西万博を見据えた取組の推進です。子どもたちだけではなく大人もわくわくドキドキしております。ぜひ、子どもたちのためにも機運の醸成と参画の促進、そして世界の方々と触れあうことによるグローバルな人材の育成、2025年大阪・関西万博とともにレガシー創造のために、あらゆる施策を展開していただければと考えております。以上でございます。

<飯泉知事>

ありがとうございました。キーワードは、ともに、ともにということでしたね。地域とともにある学校、あるいは2025年大阪・関西万博とともに未来志向で、ということですね。ありがとうございました。それでは赤松委員さん、申し上げます。

<赤松委員>

赤松梨江子と申します。私はこの度、公募委員としてお世話になります。よろしくお願

いします。私自身は42年間、公立の小中学校で事務職員として勤めました。その中で学校教育に深く関わってきました。特にこの10年間ですが、青木副会長さんのお話にありましたように、地域とともにある学校づくり、いわゆるコミュニティ・スクールの推進に深く関わってきました。青木委員さんと全く同じ意見でして、これからの学校の在り方というのは地域と繋がっていく、特に学校教育の中で、社会に開かれた教育課程を進めていくためには、その繋がりに欠かすことはできませんので、ぜひ地域とともにある学校づくり、そしてコミュニティ・スクールの推進を、真の意味のコミュニティ・スクールを進めていけるように、そして徳島が推進してきたチェーンスクール、パッケージスクール、そういったものをコミュニティ・スクールをベースにして、そういう新しい学校の形というのを進めていけたらいいのではないかと考えています。

それと、もう1点ですが、社会教育の重要性ということを考えておまして、一人の人生で見た時に、学校教育というのは本当に深く濃いものではあるんですが、人生の中で学校教育に関わる部分はほんの少しです。それ以降の社会教育で学ぶ期間というのが非常に長いものとなっていますので、生涯学び続けることのできる環境づくり、学校教育を社会教育につなげていくという、そういう教育の形を目指していけたらいいのではないかと考えています。以上です。

<飯泉知事>

ありがとうございました。こちらも社会とともにということで、いわゆるチェーンスクール、パッケージスクール、コミュニティ・スクールをベースにということで。また、さらに、生涯学び続ける、生涯学習という概念もそういった意味で出てきておりますので、これを学校教育とつなげるという話をいただきました。ありがとうございます。次に大杉委員さんお願いします。

<大杉委員>

徳島市・名東郡PTA連合会副会長の大杉といいます。よろしく申し上げます。私の方からは、PTA、保護者の立場として、またPTAの会合等で保護者から出る意見として、働き方改革による質の高い学びの実現というところを保護者としては望んでいます。先生方に負担が大きいと、子どもたちにその影響が出てきます。学校でお話を聞くとやっぱり先生の数が足りないですとか、言い方はあれなんですけど、いろんな負担を強いられているという面があるようです。校務支援システムとかICTに非常に期待していますので、ぜひこちらの方を進めていただけたらと思います。

<飯泉知事>

はい、ありがとうございました。キーワードとして、働き方改革をいただきました。確かに、今、教育現場は大変だということで、もちろんICTを活用する、DXを活用する、それだけではなくて、例えば外部委託といったこともあるわけですし、そうした点についてお話しいただきました。ありがとうございます。それでは次に河口委員さん、お願いします。

<河口委員>

河口でございます。どうぞよろしくお願いいいたします。先ほどの委員さんと同意見で、今回、大綱と振興計画が一緒になった、同時期になった、また内容的にパッケージ化されて一体化されたということは学校現場でも教職員の意識改革の上でも、とても重要なことであると思います。今までの大綱や推進計画が学校現場には定着しなかった面も正直な話であると思います。それが、学校現場で教職員の意識改革に繋がっているという意味から、大変有意義な今回の大綱と振興計画になるのではないかと思います。

もう1点、次期教育振興計画のコンセプトにあるように、ウェルビーイングの向上ということが、非常に重要ではないかと思っています。予測困難な時代の中で、教育の役割が重要視されてますが、何よりも子どもたちの精神的な豊かさや強さ、そういった子どもたちの育成が大変重要でないかなと思っています。そのためには学びに向かう力とか、精神的な豊かさとか、ポジティブな感情、ポジティブな人間関係等、そういった力を持つ子どもたちの育成が大変重要ではないかと思っています。そのために、今示されておりますいろいろな教育の視点から、取り組んでいただいて、共生社会に根差した教育推進の必要性、在り方というのを求めていくべきだなと思っています。将来を担う子どもたちのために、大綱や振興計画が有意義なものになることを願っております。以上です。

<飯泉知事>

ありがとうございます。振興計画、そして、教育大綱の一体化のお話をいただきました。河口委員さんの場合には、教育委員さんもお務めいただいていたので、河口委員さんの存在自体が一体化ともいえるわけであります。また、心の豊かさといった意味でのウェルビーイングのお話もいただきました。ありがとうございます。それでは、次に木内委員さんお願いします。

<木内委員>

徳島商工会議所副会頭の木内と申します。私に求められていますのは経営者としての視点だと思っています。経営者として、社会に出てから学ぶことができる人材をぜひ育ててほしいというところで、基本的なところを学んでいくこととか、自分のペースで学べる環境を整えてほしい。勉強でも部活動でも課外授業でも習い事でも何でもいいんですけども、努力すれば上達するという成功体験を持っている人材とか、そういう方に社会に出てほしいと思っています。

あと、IT人材がかなり不足しておりますので、DXの面を含めてできる人材を育てていただきたいというのと、今回、本会議に出るまでに調べてきたのですが、英語教育ですね、インターネットの中で使われている言語は英語が6割ぐらい、日本語は2割ぐらいというのが出ております。英語ができないと何十倍も情報が少ないというような時代となっておりますので、ぜひ、英語ができる人材ですね、日本人の英語のレベルってずっと変わっていないと思うんですけども、そういう人材を育てていただきたいと思っています。

<飯泉知事>

はい。ありがとうございます。子どもさんのうちに、成功体験をぜひということで、そ

うした方々に社会に出てきてほしい、またその意味ではD XのなかでのI T人材、さらにはインターネット全盛期における英語が不可欠といった点をいただきました。ありがとうございます。それでは次に近藤委員さん、お願いします。

<近藤委員>

徳島新聞メディアの近藤と申します。よろしくお願いいいたします。先程来、I C T化への対応、D Xという話が度々出ておりますが、私からは、学校教育のデジタル化について、一つだけ御意見を述べさせていただきます。

徳島県内でも取組が進んでおりますG I G Aスクール構想ですが、そうした流れを受けまして、2024年度頃からは、順次デジタル教科書が本格導入されるという話も聞いております。これは時代の趨勢としては、納得のできる違和感のないものではないでしょうか。しかし、デジタル教科書の本格導入は、やはり日本の教育にとって大きな転換点になるのではないかというふうにも考えております。そこで、学校教育のデジタル化に対する懸念の声も、一方であるということを通認識として持つておく必要があるのではないかと考えております。紙の教科書、紙のノート、当然それらと併用して使っていくということでしょうけれども、デジタル化のかけ声があまりにも大きくなりすぎると、やはり紙の優れた面というのが一方で軽視され、紙の良い面、メリットが失われてしまわないかということです。紙とデジタルのそれぞれの良さがありますので、それらをうまく組み合わせる、ベストミックスですね、これこそやはり求める姿であり、そこを追求していくことが欠かせないのではないかと私は考えております。

実は、私も徳島新聞におきましても、学校教育のデジタル化の流れに乗る形で、「あわスタ」と呼んでいるのですが、そういう名称の学習支援サイトを開発して、この秋から無料版を各学校の方で導入してもらっております。ですから、決してデジタル化の流れにブレーキをかけるつもりはございません。今後こうしたことを普及するに当たって、紙とデジタルのベストミックスは何かということ、先生方や教育委員会の皆さんとともに考えていきたいと思っております。デジタル化の流れというのは止めようがありませんけれども、とりわけ教育のような後戻りができない、間違った変革をしてしまうと取り返しがつかない、こういった分野については、一方でやはり慎重さも欠いてはならないと考える次第です。教育大綱、教育振興計画の策定におきまして、学校教育のデジタル化をどのように位置づけて、具体的にどう進めていくのか、なにより大きな目標である子どもたちの生きる力を育むという視点から、お集まりの皆さんとともに知恵を絞ってまいりたいと思っております。よろしくお願いいいたします。

<飯泉知事>

教育のデジタル化、これがどんどん行き過ぎてくる、そうした場合に、紙の良さといった点、つまり、ベストミックスを求めるべきではないか、いわばこれ言い換えてみますと、デジタルと紙媒体、紙媒体はどちらかといいますとアナログなんですね、デジタルとアナログ、そのいいところをベストミックスで持つていく、これが今後の大きな在り方の一つではないか、こうした御提言をいただきました。ありがとうございます。次に、孝志委員さん、お願いします。

<孝志委員>

公認会計士をしております、孝志といいます。よろしく申し上げます。公認会計士という立場から言いますと、キャリア教育についてとても大切だと考えております。今の時代の子どもたちには、ぜひともキャリアパスポートを活用していただいて、幼稚園の小さい頃から高校卒業までの間に、社会に出た時に必要となる能力とか態度とかを身につけてほしいと思います。早めに自分のキャリアを意識することによって、例えば、理系、文系を選ぶ時にも、この仕事をしたいから文系、大学進学の際には、この仕事をしたいから、この勉強をしたいから経済学部というふうに具体的にいろいろ考えられるようになると思います。

そのためには、高校卒業までの間に、様々な職業に触れる機会があればいいなと考えております。例えば、弁護士やお医者さんの仕事であれば、ドラマ等でよく見る機会があつてなんとなくこういう仕事かなっていうのがわかるんですけども、あまり触れることのない仕事というのもたくさんあると思います。例えば、公認会計士もそうなんですけれども、あまり知られていなくて、大学に入って初めて知った方も多くて、それよりも前に知る機会として、会計士の方でも中学校や高校での制度説明会をしていますし、小学校から会計を学べる勉強会もしています。ほかの仕事でも、いろんな職業を知る、企業を訪問するという機会もあると思うので、できるだけそういう機会を子どもたちに作ってもらって、将来のキャリアを考える機会ができればと思っております。以上です。

<飯泉知事>

ありがとうございます。キャリア教育の大切さ。特に、漫然と高校、大学に行ってしまう。学部の専攻も同様と。そこから考えるのではなくて、目的意識を持って逆に学部を選んでいく。そのためには、あらゆる仕事、その魅力といったものを学生のうちにやはり体感、体験をすべきではないか。実はこうした御意見から徳島県でもキッズニアを、アスティとくしまで、徳島新聞の皆さん、あるいは徳島大正銀行の皆さんとやってきたところなんです。これがコロナでできていなかった部分もありますので、今お話しいただいた点については、ポストコロナのやり方、こうした点も考えていくべきではないかと思います。ありがとうございました。次に、近森委員さん、申し上げます。

<近森委員>

徳島県青年国際交流機構の近森と申します。私は常日頃、教育という現場には、あまり携わっていないという立場ではありますけれども、ここで2点発言をさせていただきます。今回このような機会をいただきまして、委員の皆さんのお話をお聞きしておりまして、教育って何だろうと改めて考えた時に、やはり学ぶこと、知ることが楽しいと思うことが非常に重要ではないかと、シンプルではありますが改めて感じております。先ほど会議の中で、これまでの4年間の取組ということで御紹介をいただきました。その中にもたくさん取組がありまして、本当に楽しく学べているような状況も見させていただきまして、すでに内容としては入っているかと思うんですけども、ぜひ引き続き取り組んでいただければと思っております。もちろん、座学がいいとか体験学習がいいとかそういうことでは

なく、やはり、教育を考えた時に、学ぶ方にとって一番は何かというと、知識が得られる、学ぶこと、知ることで楽しいと思えることが一番と感じておりますので、そのあたりを盛り込んでいただくということをお話したいのと、学びというのは一生継続くものと私も考えております。これまでの委員さんの発言の中でも、そのようなことがありましたが、リカレント教育であったり、最近企業においては、リスクリングという言葉も出てまいりました。その学ぶということ、その素地を作るということも教育大綱や振興計画の中に入ってくるかと思っておりますので、そういった点も盛り込んでいければと思っております。

そして、もう一つは、子どもたちを取り巻く環境です。いろいろとニュースでも聞くこともあるんですけども、これまで考えもしなかったことが、社会的にも起こっていますし、子どもたちを取り巻く環境の中でも起こっているかと思っております。しかし、保護者の方や、学校関係の方だったり、地域の方だったり、誰か一人でも大人の理解者がいることで大きく変わることはたくさんあると思っております。これまでもたくさん取組をされておりますし、すべて先生方に負担がかかってしまうというのは、働き方改革の文脈においても避ける必要があると思っておりますけども、学校全体で、地域全体で、社会全体で支えていく必要があると思っておりますので、そういうところも一つ重点内容ということで盛り込んでいただければと思っております。

<飯泉知事>

ありがとうございます。そもそも教育とはということで、知識欲にどう答えていくのかといった点、そして、従来はリカレントと呼んでいましたが、確かに昨今、企業ではリスクリングをどうしていくのか、どう対応していくのか、お話をいただきました。また、子どもを取り巻く環境、確かに今日も昼のニュースを聞いていると、ある保育園で子どもさんを宙づりにした、ナイフを突きつけたとか、逮捕者も出ている、こうした様々な考えもしなかったことが起こる、ここのところは社会全体で支える必要がある、こうしたものをしっかり位置づけるべきではないかという御提言をいただきました。ありがとうございます。それでは次に、土井委員さんお願いします。

<土井委員>

よろしく申し上げます。土井と申します。現在、富岡東中学校・高等学校で英語の教員をしております。私は委員の中でも生徒に一番近いところにいるのかなと思っておりますので、生徒の様子を中心に話しさせていたいただきたいと思っております。

私は、今17年目なのですが、教員をしてきて最近特に感じるのは、生徒の気力が低下しているということです。私が採用されたすぐの頃は、すごく元気でやんちゃな生徒がたくさんいたのですが、最近そういった生徒が少なくて、学校に来られないとか、精神的に病んでしまって精神科に通っているというような生徒がすごく増えています。この原因の中に、最近のコロナの状況もあると思っておりますし、夢を持ってない社会といいますか、現実的のものを考えなければ生きていけない、夢を見ているところでない、という空気を子どもたちも感じているのではないかと思います。家庭や社会全体を包み込む閉塞感が今すごくあります。

そこで、それを打開できるのが、子どもたちに一番近い教員ではないかと思うんです。

毎日しんどいことがあるけれど、学校に行ったら先生に会えて元気がもらえるとか、友達に会えて楽しいとか、そういうことを感じさせてあげたいと思うんですが、なかなか教員も疲弊していて、よくニュースに上がっていますが、部活指導をはじめとして、過重労働により教員全体が元気を失っている。そして、ここに来て楽しい行事が縮小されて、生徒たちもストレスをためて、すごく悪循環というのでしょうか、どこに活力を求めていくのがすごく難しい。だから、教員として教壇に立つ時は、嘘でも元気に行っているのですが、まず教員が元気に働ける職場ということで、私は教員の労働環境の改善は必ず必要だと思います。これが根底にまずあるのではないかと考えています。

教員数の確保も難しいですね。今、「ブラック」というキーワードで報道されていますので、採用試験の倍率なんかも2000年の時には13.3倍あったものが、去年は3.7倍まで落ちています。やっぱり13人から1人選ぶのと3人から1人選ぶのとでは教員のクオリティも下がりますし、やはりその辺も懸念しているところです。

あと、2点目ですが、コロナと関係しますが、グローバル人材を育成しなければならない状況であるのに、コロナで海外への興味を絶たれているというか、なかなか生徒たちが外へ目を向けることが難しい、いざ目を向けたらウクライナとロシアが戦争しているとか、そういうことでついつい私たちは日本にいるから外国のことはいいと、「心の鎖国」をしている生徒が結構いるなという感じがします。それを打開できるのは、授業で海外に興味を持たせてあげることだと思うんです。私は英語の教員なので、すごくそういうのは気をつけてやっていますが、6月に富岡東高校でオンラインでオーストラリアの高校生と交流した時に、すごく生徒たちがいきいきしていたので、それが英語学習のモチベーションに繋がっていくのだろうと私は感じました。教材づくりもすごく大事ですが、その基になるモチベーションを作ってあげることが大事だと思います。以上です。

<飯泉知事>

ありがとうございます。最近の生徒さんたちの気力が萎えている、内向き志向といった傾向が見られる。しかし、そうした点については先生方が、前向きに、そして元気なお姿を生徒さんたちに見せる、ただ、今働き方改革が大変なんだというお話をいただきました。その意味では先ほどから御意見が出ておりますが、早く働き方改革を、教員の皆さんが教員をしていて楽しいと思える、そうした教育現場を作ることが生徒さんたちに夢と希望を与えると、もっと言うと生徒さんたちが教員になりたいと思える良い循環になるとベストだ、というふうに捉えられるかと思えます。

それから、またコロナ禍ということで、どうしても全体に内向き志向、グローバルと口では言うわけですが、富岡東高等学校の110周年の時にも申し上げましたが、そうした点をいかに、ここは逆にDXも活用する、あるいはこれから万博に向けて、三次元仮想空間メタバース、こうしたもので実際にいながらにして体験することができる、こうした技術、例えばNHKで開発いただいている、8Kを今度は5G、6Gでと、こうした形で、もちろんリアルも大切なのですが、そうしたハイブリッドでもって、生徒さんたちにしっかりと海外を日本にいながらに見せて、次行くんだ、行きたいんだと、こうした形で進められるように、我々としてもしっかりとバックアップをさせていただければと思います。ありがとうございました。それでは、豊永委員さん、よろしく願いいたします。

<豊永委員>

失礼します。生光学園高等学校の豊永と申します。よろしくお願いたします。私も高等学校で勤務しております、土井委員さんにすごく共感する部分があります。

一つは、子どもの身体能力の低下にすごく危機感を覚えております。新型コロナウイルスの関係もありまして、やはり運動する機会、それから部活動等の行動制限等があり、全国的にも競技レベルの低下をすごく感じています。この度も、全国高校総体が徳島県で開催されて、私自身も運営や選手育成にも携わってまいりましたが、やはり競技レベルの低下、記録の低下をすごく感じました。毎年毎年、日本高校記録だったりとか、そういったことが大きく報道される中、今年はほとんどなく、入賞記録も例年の記録よりもずいぶん下回ることが多く見られて、これをどう回復していくのかというのが課題としてあげられている部分だと思います。

育成といいますと一年や二年でできるものではありません。実際、本校の生徒で高校3年で出場した生徒も、中学校1年生から6年間かけて、この度の徳島インターハイに備えてまいりました。やはり、人材を育てるためには、時間と労力が必要になってきます。それを、どうカバーしていくかが今後必要なことだと思います。これから徳島県の未来のアスリートに直結する大切なことだと思いますので、先ほどありました小中高のトップスポーツ競技育成事業、これの強化っていうのもっともっとならないといけないような気がします。子どもたちを本気にさせる、やる気にさせることが重要になってくるのではないかと思います。

最近では、土井委員もおっしゃっていましたが、簡単に諦めてしまう、自分にはできるんだという自信がない、という子どもたちもたくさんいます。それをどういうふうにしてサポートしていくかというのが私たち指導者としては必要なことなのではないかなということを感じました。

それともう一つなんです、せっかく高校生まで育てた選手を県外に就職、進学で出してしまうこと、輩出してしまうことについて疑問に思うことがあります。今現在、四国大学さんでは受入れ体制をすごく広げてくださって、中高大の連携が取れつつある。今本当に感謝しているところなんです、今度大学を卒業して、このアスリートが徳島でどういうふうに住んでいくかというのが、もう一つの問題になってくるかだと思います。ゆくゆくは企業でスポーツをしながら世界を目指したりとか、そういうことによって中学生、高校生の一つの目標になっていくということが往々にしてあると思います。

就職に関して、日本では「アスナビ」といって、就職活動支援制度、これはJOCの方で作られているものなんですけども、いろんなスポーツの方々が企業に就職するのに就職困難である、それをサポートしてくれる支援なんですけれども、それを徳島でもぜひ行っていただきたい。そうすることによって、徳島にもっと活力がもたらされると思いますし、ゆくゆくはこのアスリートが指導者となって、また子どもたちのために指導ができるのではないかと、こういうふうで徳島の選手を徳島で育てるといふものをゆくゆくは考えていきたいと思っています。

<飯泉知事>

どうしても子どもさんたちが、最近諦めるということで、これは今までも皆さん方から出たところでもありますので、これも御意見として出ている成功体験を早い段階でもらうことによって、諦めない、ネバーギブアップなんだと、こうしたところを早く子どもさんのうちに体感をし、それが社会人に繋がっていくと。

それからもう一つは、小中高大、そして就職ということで、今お話しいただきましたように、豊永先生に育てていただき、生光学園で日本記録を出していく、今度は四国大学で日本記録、こういったいい流れがようやくできてきたところです。

あと問題はそこから先、確かに指導者としての道がありますし、企業スポーツとして参画していくというのがあるんですね。あとは、その体力・特技を生かして就職する。実は、今回、四国大学のセブンズラグビーの方で県警に採用になりまして、実は女性警官は従来でしたら職種を決められてたんですね、例えば機動隊は絶対無理みたいなどころがあるわけなんですけど、最近ではそうではなくて、逆に組織的にもなれている、あるいは体力的には男性の警察官よりも上なんです。これも警察本部で意見交換をした時には、ぜひそういう皆さん方をどんどん採用したい、そして例えば体力的に女性警官の皆さん方が第一線機動隊の、なかなか大変だけれどもパワースーツも今できてきている、福祉現場、農業現場、それだけではなくて様々なところでそうしたものも活用しながら、これもDXを活用したり、様々に今可能性が開けてきておりますので、我々としてもしっかりと皆様方を支えていく、そして活躍の場をしっかりと作っていければと思っています。ありがとうございました。それでは、次に長野委員さん、お願いいたします。

<長野委員>

NHK徳島放送局の長野と申します。よろしくお願いたします。私は今年6月に徳島に着任いたしました、徳島に住むのは初めてなんですけれども、24市町村すべてに御挨拶に伺いまして、教育長の皆様にもお会いいただいてお話を伺いましたので、そちらを踏まえて、皆様の方がお詳しいと思うのですが、意見を述べさせていただきます。

まず、私からぜひ力を入れていただきたいと思う点は、ふるさとを誇りに思えるような教育をぜひしていただけたらと思っております。少子化で学校が町に一校しかないというところもございます。そこで二十数人の生徒さんたちが一生懸命学んでいると。高校や大人になったら出て行くけれども、また帰ってきてほしいと皆さん口をそろえておっしゃっています。ぜひいつか帰ってきたいと思えるような教育をしていただきたいと感じています。

もう一つは、学校の授業はいろいろデジタルも発達して地域格差がそんなにならないようなのですが、やはり、部活動が厳しいという御意見がたくさんあります。野球のチームが作れない、サッカーができない、子どもたちが希望する部活動ができないというのが大きな悩みと伺っております。そのあたりをサポートするような体制を作っていただけたらと思っております。さらには、これまでもありますが、教員の皆様を後押しするような体制づくりができれば、より力強い教育に繋がるのではと感じております。

また、これは教育とは外れると思うのですが、安全安心に通学できるという点についても、地域によっては深刻な課題を抱えておりました。学校が一つしかないのも、保護者が車で送迎しなければいけない。その保護者がコロナに感染等すると子どもたちがたちまち

学校に通えない。そのあたりも踏まえた教育のサポート体制、自宅学習等も含めてということになるかと思いますがお願いしたいところです。

私の立場上、メディアに従事しておりますのでお願いしたい点は、メディアリテラシーにぜひ力を入れていただきたいと思っております。先程来、デジタルを使った教育ということがございますが、いろいろニュースになっておりますように、インターネット、SNSを介して犯罪に巻き込まれる子どもたちが後を絶ちません。幼い頃からインターネットとどう付き合っていくのか、非常に情報がたくさんあるのはいいことなのですが、その情報を正しく扱い、活用できる人材を育てていくことが、子どもたちを守るだけでなく、大人になって社会で活躍できる人材づくりにも繋がると思っておりますので、インターネットの活用の在り方について、子どもたちに幼い頃から教育の中で考えるようにしていただけたらと思っております。

<飯泉知事>

ふるさとに誇りを持てる、これが結果としては、また再び帰りたいということに繋がる。これは伝統芸能、文化も同様でして、41件の民俗芸能「風流踊」、徳島の神代踊が選ばれたのですけれども、こうしたものが誇りになっていく、また良いことを子どものうちからどんどん知っておくということが重要な点だと思います。そうした意味では、逆にNHKの皆様方にこんないいことあるよと全国版で放送していただくと、それがまた自信にも繋がりますので、我々もいい題材を教育委員会と出していきたいと思っておりますので、よろしくをお願いします。

また、部活動が大変というのは、少子化では必然の話になってきます。鳥取県の高校のラグビー部が一試合もせず花園に出ると、この善し悪し、こうした点も出されているんですね。今後はスポーツの在り方も学校単位がいいのか、もうサッカーは既に学校単位だけではなくて、いわゆるJリーグのアンダーチーム単位、こういった形がごちゃ混ぜになっていますので、ここで新たな在り方といったものをしっかり打ち出すべき時が来たのではないかと考えています。

また、教員の後押しをというのも、既に皆さんから出たところでありますので、働き方改革、また地域の皆様方にいかに支えていただくのか、安全・安心の点もこれも少子化・人口減少のなせる技ということもありますので、今徳島ではそれぞれの高等学校、県境にあるところ、例えば海部高校、鳴門渦潮高校、池田高校、こうしたところは全国から集めるという形、また希望が多いんですね。それぞれ種目が違う、特にスポーツ等でそうなのですが、そこで総合寄宿舎、かつてはどんどんなくしていったものを、どんどん快適な寄宿舎にしていく、今増設をどんどんして全国から生徒さんを迎える、それが結果として徳島の教育の特色ある部分を全国発信することができるようになっておりますので、こうした点もぜひ取り上げていただければありがたい。その意味でのメディアリテラシーの話がありました。特に日本の場合、すべてがそうなんです。いろんな場でこの話が出た時に、申し上げるのがスキーです。つまり、最近強くなりましたが、なぜ日本がアルペンスキーが弱いのか、まずスキーに行った時に転び方から教えるんです。ヨーロッパ等は違うんです。まず、走りなさいと。走り方だけでいくんです。まずやってみて、痛かったよね、だからそれを気をつけようねという。根本的に日本の価値観を変えないと、今御指摘いた

だいた点というのは、なかなか難しい。大人が逆にあまりにも守りすぎてしまうところがある。昔は結構みんながやんちゃして、刑法犯になると問題なのですが、そのあたり大人の皆さん方が、温かく遠巻きで見守っていた、でも危ない時はぱっと出てきてくれる、こうしたところが今あまりにも無関心層が増えすぎている、これも社会的な現象なのではないか、こうした点は、我々はまさに全体的な点として、この両方の計画、大綱に入れるべき今後の課題だと思っておりますので、大変重要な点、御指摘ありがとうございます。それでは、中南委員さんよろしく願いいたします。

<中南委員>

中南香菜と申します。私は現在、鳴門教育大学の教職大学院の方で、徳島県の小学校教員を目指して勉強しています。学生の立場から意見を述べさせていただきます。

私は9月、11月と小学校に教育実習に行ったのですが、そこで現場の先生から実践の中で御指導いただきたくさん勉強になることがありましたが、その先生方から御指導いただく時間が申し訳ないほど、先生方が忙しすぎるというのをすごく実感しました。現場に行く前にも、先生は忙しいと聞いていたので、覚悟はしていましたが、それにしても忙しすぎるというのが率直な意見です。何の仕事をしていても大変だとは思いますが、実際一緒に行った教職を目指している学生たちも、先生になるのを諦めようかなという声も実際ありまして、私自身は教師になるつもりでいるんですけども、そういう声があるのも事実で、教員のなり手不足だったり、採用試験の受験志望者の減少というのも教員の多忙さが関係しているのではないかと思います。

私は、現在、学びサポーターとして鳴門市の小学校に行かせていただいておりますが、そこでも感じるのは人手不足が原因で、教員の多忙化が進んでいるのではということです。人手不足に関して、私が思うのは、教師になりたい学生がこれだけいるのに、もっと学校現場で学生を使ってほしいと思いました。実際、私は大学院で教職の勉強をしていますが、実習に行くまでの一年半、子どもと触れあうことがあまりない状況で教職について勉強していました。学生たちは子どもと触れあう機会に飢えているので、そういう意欲を学校現場の人材不足とマッチさせると働き方改革にも繋がるのではないかと考えています。

<飯泉知事>

ありがとうございます。まさに教職を目指されるということで、現場の一番のポイントを御指摘いただきました。日本もちょっと中途半端なところがあるんですね。インターンシップ、先ほどからもお話があるんですが、ちょっとの間だけ体験的ということなんです。そうではなくて座学もいいんですが、例えば半年間ぐらい、あるいは半日は学校現場に行って、先生方と共にサポートをして教えていただきながら、もう教職をやると。例えば、英語助手といった形で英語の先生にアシスタントのランゲージティーチャーとしていくと、教職がないもんですからその人だけではできない。同じことですね。教職を目指す人たちのインターンシップというよりも、半日間そこで実習することの方が、座学ですとやるよりも重要な点があるし、もちろん座学も重要なのですが、逆に今はICTを活用すれば、大学の先生方が遠隔でその様子を見ておくこともできるわけですので、それを論文で先生方が出していく、実習に出て行った方がその教授の論文のお世話をするとか、

自分で書いてみて卒論になる、こうしたいい循環、もっともっとやっていけばいいんじゃないか、これはまさに教育実習をされている生の声をいただきました。こうしたものが新しい制度として、場合によってはそれでお手当が出るというやり方ができれば、違う形でアルバイトをして生活費を稼ぎ出すとか、コロナの時にそれがクビになって生活ができないと、もう東京大阪から徳島に帰りたい、それへの支援というのを我々やってきたんですが、いい循環を逆に作って、そして教職としてそのまま入っていただく、新たなお話を、教職を目指す方の生の声としていただきました。ありがとうございました。それでは次に花本委員さんお願いします。

<花本委員>

花本絵美と申します。鳴門市の明神幼稚園からまいりました。幼稚園教諭の立場から述べさせていただきます。幼稚園の教育は、心情、意欲、態度、基本的生活習慣等生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、環境を通して行うものとされています。その中で、幼児が生活を通して、主体的に身近なあらゆる環境にかかわって、様々な活動を展開して充実感や満足感を味わう体験を重ねていけるように環境を整えながら日々行っているところです。

先ほどのお話の中にも成功体験という言葉がたくさんあったのですが、小さいうちから困難を乗り越えていくために子ども同士のいざこざ、喧嘩の中から、そういった乗り越え方などを学んでいるところです。成功体験ばかりでなく、失敗体験も多く経験して、その中で自分の力としてどうやって乗り越えていくかっていう部分を身につけていっているところです。

先ほどの資料の中にもあったのですが、私が勤務している瀬戸中校区では、幼小中の「学びのかけ橋」プロジェクトを実践しておりまして、今文科省の方からも強く提言されていて、県内でも今取り組んでいると思うのですが、その中で、またコロナ禍ということで、十分な交流の計画をしていますが、できない状況にあたりするので、どのように計画を進めていくかっていうのが課題であると思っています。

また、先ほど先生方からお話もあったように、教職員の疲弊について、よくメディアでは小中教員の疲弊が取り上げられていますが、幼稚園現場もあまり報道されていないのですが同じ状況にあります。持ち帰りの仕事もありますし、教員不足が大きいのと、市町村によっては働く年代層に偏りがあったり、見て学ぶ、繋がるというのが、少なくなっていて、若い教師ばかりになっていて困る状況というのもみられています。

<飯泉知事>

ありがとうございました。成功体験だけではなくて、子どものうちに失敗体験、これもやはりしておくことがプラスになるというお話もいただきました。また、幼稚園の現場も大変だと。確かに、真っ先に少子化の影響を受けるのは、高校ではなくて中学、中学ではなくて小学校、小学校ではなくて幼稚園、保育園ということになる。ということで少子化の最前線におられるということですので、ちょうど来年の4月、こども家庭庁ができあがる中で、新たな予算を国としても作っていきたくて、つまりこれは何かということお金がそこにつけられるわけですから、新たな制度を作ることが実はできるんですね。ということ

で、例えば市町村単位、特に町村単位で幼稚園の先生を回していくのにも限界が当然出てくるわけですから、今の年代の偏りと、逆に全県下一本化していく、また公私の間に交流、あるいはバッファーとして作る。これが働き方改革。例えば、育休、産休、こうしたところで欠けた場合に対して、違うところから来ていただくと。そこをずっと回る先生がおられてもいいですね。

実は、平成2年の時、私は山梨県で私学・国際課長というのをやってまして、私立幼稚園協会の中で3人幼稚園の先生をプールして、当時は働き方改革だとか産休、育休というのはなかったんですけども、そういう場合にどうぞお休みください、そしてその現場へ先生が行ってもらって、今度はこちらへ、という形で回していたというのがありますので、そうしたのも一つの例として、もう少し大きい規模でやっていくというのも今後あるかと思います。今回の点、しっかりこれも書かせていただくだけではなく、国への政策提言という形にも使えるかと思いますので、どうもありがとうございました。それでは森下委員さんよろしくお祈りします。

<森下委員>

横見小学校の森下と申します。私は長年人権教育に携わってきたので、人権教育の立場からお話をさせていただきます。近年は新型コロナウイルスにおける偏見、差別やワクチン接種における人権問題等が、社会問題になってきていました。また、インターネット上での誹謗中傷やトラブル等も低年齢化してきていると感じています。いじめや児童虐待、また性的マイノリティ等、子どもたちの身の回りには本当に様々な人権問題があふれている状況です。SDGsの土台にも人権が据えられていて、誰一人取り残さない社会をつくるためには、人権を抜きにしてはその目標も達成できないと考えています。

前半の審議会の課題の中にもありましたが、令和の時代にはこれまで以上に人権教育を充実させていくことが求められていると考えています。本県では、同対審答申の出された頃から、「一人の百歩より百人の一步」を合い言葉にして、県下全域で就学前から社会教育まで、同和問題をはじめとした様々な人権問題解決のために取り組んできた歴史があります。これまでの実践の成果を受け継ぐとともに、新たな人権課題にもしっかり対応できるよう教育大綱や振興計画においても人権教育をしっかり位置づけるべきだと考えています。命の大切さや自他の大切さを実感できるような教育や自己肯定感を育む教育、多様な人との出会いとか、友達との協働的な活動を通して主体的に取り組むことができるような実践をしていくためにも、道徳教育を始め、様々な教育課程の中で、人権教育を適切に位置づけるべきと考えています。そのために、教職員の経験年数に応じた研修体系の構築の必要もあると考えています。人権教育は不易と流行でいえば、不易の部分に当たると思われます。時代がどのように変わっていても地道に積み上げていかなければならない教育だと思うので、これをやはり徳島県の人権文化として根付かせていけたらと思っております。

もう一点、今年度現場に戻った教員の立場として、阿南市では今年度からすべての小中学校でコミュニティ・スクールを位置づけて取り組むようになっていきます。私も本当に手探りの状況で、コミュニティ・スクールの委員からは「何でも困ったことがあったら言うてよ」、「昔はこうだった」というように、すごく親切に、先週も第2回が終わったのですが、何でも支援するという言葉を皆さんに言っていただき、学校だけでは解決できない

課題に対して、壁に穴が開いて風が通ったような実感がありました。これから、これが必要になってくることは、自分も実感しているところであり、コミュニティ・スクールの運営の仕方とか、実践例とか、学びの機会を私たちにも与えていただけたらと思っています。

<飯泉知事>

人権教育が子どもさんたちに、様々なテーマを語りかけてくれる。そして、誰一人取り残さない。デジタル社会の時にも、必ず使われる言葉ということで、これはSDGsに繋がってくる。10番目の目標ダイバーシティ、まさにここがそれに当たってくるところでありますので、しっかりとこれを位置づける必要があるかと思います。

また、先ほど赤松委員さんからもコミュニティ・スクール、これがすべてのベースにというお話をいただいたわけなんですけど、今森下委員からもお話しいただいたように、コミュニティ・スクール、これをしっかりとやっていくというお話をいただきました。ありがとうございます。次に森永委員さん、よろしく願いいたします。

<森永委員>

国府支援学校の森永尚実と申します。先生方のお話を伺って、気力のない子、元気のない子が増えているということで、高校入試や大学入試というゴールが、すごく厳しいものなんだということを改めて感じています。

特別支援学校の小学部では、子どもたちのできることを増やしていくというボトムアップの考え方を大切に、個別最適化した学びを保障するようにしています。子どもたちが分かった、できたという思いをたくさん持てるように、実態に合った課題をつくって、意欲を引き出す教材をつくってということに毎日取り組んでいます。なので、子どもたちの思いや願いを大切に授業はすごく幸せな時間で、ともに学び合う時間は皆様方に見ていただきたいようないい実践がたくさんできていると感じています。

しかし、年々、在籍する子どもの数が増えてきて、仕事の量は増えてきています。本校では、昨年度からスクールワイドPBSに取り組んでおります。良い行動を増やすことで、問題行動を未然に防ぐ予防的な関わりをするということで、教員間で子どもたちにつけたい力を検討した後で、チームで目的を共有して、学び合う機会を作っております。チームで学び合うことができることで、先生方からいろんな学びがあって、刺激をもらってポジティブに、仕事量は多いのですが、取り組むことができます。とても有意義だと感じているので、若手の先生方を支えるために、教材教具を共有する環境を作るなど、この取組を進めてまいりたいと思っております。

働き方改革が叫ばれておりますが、ぬるい環境を作るのではなく、時間は短くするけれど、みんなで協力して、ぎゅっと凝縮されたものを作っていくということはすごく効果が出るものではないかと考えています。校内での支援は全力で取り組んでいますが、子どもたちが地域で暮らす、その暮らしを支えていくために、地域に開かれた取組をするということについては、これからの課題だと考えています。池田支援学校美馬分校でされているみまカフェのように、特別支援学校で子どもたちが就労に向けて取り組む姿を実際に見ていただいたり、カフェでくつろぐ中で子どもたちが頑張っているんだというのを見ていただいて、ポジティブな意見を持っていただくことで、子どもたちがこれから出て行く社会

に温かい風土を作っていけるようなことに、私たちも取り組んでいきたいと考えています。

私たちの願いは、「新時代対応！国府支援学校整備事業」にも反映していただいております。ダイバーシティの実現に向けて地域と連携すること、私たちの専門性を生かして地域に貢献することの一つ一つ取り組んでまいりたいと思っております。

<飯泉知事>

特別支援教育の現場のお話をいただきました。今のお話、従来の養護学校の時代とは真逆の話がすべて出てまいりました。例えば、生徒さんの数が増えてくる、昔は逆だったんですね、どんどん減っていた。今は特別支援学校に行かせたいことが多くなって、そういった結果が先生方の過重労働になってきている。でも、これは楽しいことなんですよ、というお話をいただきました。

それともう一つは教育の在り方、チーム教育をやっています。かつての養護学校、あるいは地域の学校のいわゆる特別支援学級は個別教育が中心だったんですね。しかし、そうではない、今はチームでしっかりやっていく、こうした形が出てきている。というのも、今、国が考え方を全く変えてきた。特別支援教育という概念を作った以降、ようやく今回設置基準まで作った。今までは特別支援学校の設置基準は全くなかったわけですが、しかしこれを作る、そして徳島の場合には、ダイバーシティの基幹校として国府支援学校をまさにその設置基準、先取りをしてやっていこう、すでにBIMを使って完成図といったものを既に基本設計の中で作る。普通は実施設計の中でやるんですけども、それも出させていただいて、その中で今お話しをいただいた、様々な現場の先生方からいただいた、ここはああすべきである、ここはこうすべきだ、こうした御意見もいただいているところでもありますので、しっかりとダイバーシティ教育の基幹校を国府支援学校、そしてもう一つは、発達障がいの中核校として、日本の中核校としてのみなと高等学園、この二つをツートップとして、親御さんたちにもしっかりと寄り添うことのできる、こうした形を進めているところでもあります。教育現場、なかなか大変だとは思いますが、非常に意義あるお仕事でもありますので、さらにいろいろな工夫、あるいは御意見を頂戴できればと思います。ありがとうございます。それではお待たせしました。若山委員さん、お願いします。

<若山委員>

南部中学校で教員をしております若山と言います。よろしく申し上げます。私も現場で教員をしていますので、普段現場で感じていることを主にお話しできればと思っています。先ほどから、何度もお話に出てきていることなのですが、今の中学生も無気力というか、やる気があまりないと感じる生徒が年々増えてきているように感じています。

今の中学3年生は、入学当時からもコロナ禍で、入学式も縮小、イベントも縮小、もっと小さく言えば、学級の中でのコミュニケーションを取る班活動も縮小していて、人と話をする、また、マスクを取る機会も少なくなってしまったので、同級生の顔も今ひとつというところで、コミュニケーション能力が落ちてしまっていると感じています。コロナのことだけが一概に原因といえませんが、例えば「何か意見を言ってね」と言った時にも、手が挙がりにくいというか、自分の意見を自分の言葉で発言するというのがすごく苦手だと感じている生徒が多いと感じています。ただ、個人を指名して意見を求めるとそこでは

発言できます。なので誰か発言してというときに、自分で考えて自分の言葉でという能力が少し落ちてきているのではないかと感じています。

これもお話があったのですが、特別支援学級、学校ではなくて、通常の学校の特別支援学級に入級する生徒も増えてきていると感じています。個別の指導になってきますので、それぞれがそれぞれの授業を組み込んでいきますと、学校全体の時間割を組むというところに、難しいところが出てきています。今年度も本校では、大分時間をかけて時間割を構成したのですが、それでも難しいところがあって、個人個人に応じた時間割を組むようになると、難しいところがあるのかなと思っています。

あと、通常学級の中に、発達障がいと呼ばれる子どもたち、疑いなんですけれども、特別に支援がいる子どもたちも増えてきているように感じています。そういった面で誰一人取り残さない教育を目指すためには、先ほどもあったのですが、学生の力を借りたり、再任用の先生の力を借りて、二人体制、三人体制で授業を行うことで、その子たちの学力も保障できるのではないかと感じています。

また、不登校の子どもたちも増えてきています。本校でも各クラス二人から三人はなかなか学校に来れない、もしくは全く学校に来れないという生徒もいます。その子たちの学びの機会の保障というの、工夫していかなければならないことだと感じています。

最後になりますが、いろんな委員が言っていますが、働き方改革の点で工夫が必要だと思っています。本校も若手もいますが、再任用の先生方の力も借りないと学校が回っていかない現状があります。私も個人的な話ですが、三人の子どもがおりまして、自分の生活と仕事のワークライフバランスを取るのがすごく難しく、どちらかに力が偏ってしまうと、どうしてもうまくいかず、ただ両方のバランスを取っているとどっちともが中途半端になってしまうという現状がありますので、その点も考えていかなければならないところかなと感じております。

<飯泉知事>

ありがとうございます。中学校の現場においても、生徒さんの気力の問題、あるいは働き方改革、同様なんですよと。また、通常の学校の中の特別支援学級の希望者が増えてきているということで、ここが大変になってきているというお話をいただきました。これも発達障がいという概念が保護者の皆さん方、あるいは学校教育現場でもかなり広く認知されてきている。やはり、一番重要なのは、早期発見、早期対応、医療・福祉・教育、三位一体での対応。出口はやはり就労がありますので、我々としてもしっかりこのあたり、特別支援教育、この観点の中で、そして自立という形にこれが結びついていく取組を進めていければと思います。

それでは、ここからは、教育委員の皆様をお願いしたいと思います。では、岡本委員さんから順に教育長までお願いします。

<岡本委員>

岡本弘子と申します。長年、小学校教員をしておりまして、退職した後、現在、鳴門教育大学に勤めております。

私は徳島の未来を創っていく、そして未来の社会を創っていくのは人であり、それが教

育であると思っています。その教育がどうあるかによって、今後の徳島が決まっていくのではと非常に重く感じています。高齢化が進み、人口減少が進む徳島において、どういう教育をして徳島を輝かせ、発展させるかというのが大きな鍵になるのではないかと感じています。

先日も高校生が様々な企業、地域と連携して活動しているところを拝見しましたが、いきいきと生徒が活躍していますし、社会に参画していると感じました。教育において、そういう地域社会、文化、スポーツ、様々なものと真剣に関わり、発展させていく人材になっていくことが非常に重要なのではないかと感じています。これまでのように知識だけを継承していく教育ではなく、やはり地域の担い手になる、これからの徳島を支えていく、輝ける徳島を創っていく人材を育てていく大事な転換期ではないかと感じています。

そして、二つほど大きなお願いがあります。行政に関してなのですが、DX、GIGAスクールと申しました時に、現場では1人1台端末が配られたわけですが、非常に遅かったり、不具合があったり、つながらなかったり、そして修理に出すと長々と返ってこなかったりして、誰一人取り残さないとはいえ、非常に取り残されている状況を多々目にします。進めていく中において、そういう環境設定、環境整備をするのは行政の役割ではないかと思えますので、教師がストレスなく、怖がらずに使えるような環境設定をしていただきたいと非常に感じるところであります。

もう一点は、人材確保の点です。教員の定員というのが昔の定員と今の定員とは違ってきていると思います。産休、育休で休んだ場合に、学校現場において補充の教員が見つからずに担任がいないまま、教頭や空き教員が走り回りして、そこを補充している状況が見られます。

それから、短時間勤務の教員が非常に増えて、担任になる教員が非常に少なくなる、またコロナ禍において、濃厚接触者になった場合に教員が休んでしまうとそこを補充する者がいないという状況が非常に多く見られますので、定員数を増やすのは当然のことではないかと思っています。

先ほど、知事や中南委員がお話しされた、インターンシップのことですが、大学に勤めているなかで、非常にやる気のある、これからの教育を担っていくであろう学生たちを目の前にしておりますので、もったいないなと感じています。形ばかりの実習、それからインターンシップというのではなく、本当に教員になるべく人を育てていく地域社会となるように、そういう制度をうまく活用して人員の補強の一助にしていっていいのではないかと感じています。ちょっと大胆な策ではありますが、インターンシップに行かせて、その間アルバイトに行けずに食べるのに困るわけですから、そこに対して何らかの補助も出るとか、学校現場で本当に働き手となる学生を育てていって、魅力ある教育活動を行っている徳島で勤めたいと思うようなインターンシップであればいいなと思います。

この教育大綱を決める際において、大綱がお題目ではなく、どの教員も教育に携わる人も、地域社会もこういう人を目指しているんだな、こういう徳島を目指しているんだなと分かるものにして、徳島が発展していったらいいなと思います。

<飯泉知事>

GIGAスクールの点については、一気に全国でしたといったことがあって、調達もバ

ラバラだと。県と一緒にやった市町村もあれば、市町村単独でということもありまして、そこに入って来るのが遅れたり、その後の保守点検、これが今のウクライナあるいは物価高騰、円安ということでものが入ってこなくて直らない、こういったことも実はあつて今の現状となっております。

あと、人材の点について、定員の話をしていただきました。ただ、今全国でもあらゆる分野で人材不足、人手不足と言われておりますので、今ここで活路を見出すのは、意欲のある学生さんたち、そして、バイトではなくお手当を、先ほど申し上げたのは実は絵空事で言ったのではないんですね。徳島県はニーダーザクセン州と友好提携を結んでいますが、実はドイツはマイスター制度ということで、徳島県の技術屋さんとは人材交流しているのですが、彼らは例えば徒弟制度ができていて、いわゆるバイト的に来ている時にも、研修に来ている時にちゃんとお手当が出るんです。ということでドイツのマイスターというのは世界に冠たる制度となっていて、ホワイトカラーよりはマイスターの方が上なんです。日本ではホワイトカラーの方が上という時代が多かった。学校での卒業式だとか成人式だとか、よく典型だと言われたんですけど、そうした点を考えると、これから人手不足、そして新たな意欲ある人材をとということであれば、先ほど申し上げた、そして今岡本委員がおっしゃっていただいた形をどの分野でやっていくのか、教育の分野でやっていく、これはかなりある。教員不足といった点もかなりありますので、そうした点をこれからいよいよ考える時に来ているのではないかと、また、考えるだけではだめで、実践に移す時が来たのではないかと、このようにも思っております。それでは次に河野委員さんお願いいたします。

<河野委員>

河野といいます。中学校の教員として長年働いて、現在徳島県サッカー協会の会長もさせてもらっています。今回の働き方改革に関連してですが、部活動の地域移行が始まっています。令和5年から7年を集中的な改革期間ということで、来年からできるところから始めるということですが、外部人材の活用等もありますが、どうしても学校や地域によつての差が大きいというのがあります。

個人的な意見ではありますが、部活動の地域移行を進めていくとしたら、将来的には、総合型の地域スポーツクラブの整備・充実が必要になってくるのではないかと考えております。総合型の地域スポーツクラブに人材、施設、資金、そういうものを投入して、子どもたちの未来に、よりよい生き方ができるような取組をしていただきたいと思います。市町村によっては、既に総合型の地域スポーツクラブがあるところもあるのですが、部活動によつての差が大きいという点もあります。地域や学校、部活動によつて違うとは思いますが、将来的にそのように進めていただければと思っております。

<飯泉知事>

学校教育現場の働き方改革で今、国を挙げて部活動の外部委託、この話がテーマになっている。どんな形がいいか、その具体的な受け皿として、総合型地域スポーツクラブ、今、徳島県では別途スポーツ協会をはじめとして、総合型スポーツクラブ、これを全県下に広げようという形で進めているところであります。ちょうど流れとしてはマッチングするところでもありますので、我々としてもしっかり位置づけて取り組むたいと思っております。

<三木委員>

三木千佳子と申します。保護者として日々、学校に関わっており、そこで実感することですが、今の世の中、多様性がすごく認められ、子どもたちもものすごく多様性がある中で、先生たちが教育現場で対応しきれていないのではないかと感じています。人材不足もあるのですが、先生方の経験不足ということも大きく感じております。他の委員の方たちがおっしゃっていた、学生が学校現場に出て行く取組は非常にいいなと思っています。現場に出てからではなく、学生時代から、現場で経験することによって、対応力を身につける機会にもなるのではないかと思いますので、実現できればいいなと思っています。

また、先生方は本当に忙しい中、いろんなことに対応していかなければならない中で、保護者対応もとても大変なのではないかと思っています。すごく学校へ意見を言ってこられる保護者、いわゆるモンスターペアレントへの対応として、その先生方の負担を少しでも軽減するため、通話を録音する方法があると思います。勝手に録音はできないと思うのですが、録音させていただきますと一言言いながら電話対応すれば、保護者の方もちょっと意識して、配慮のある意見の言い方になるのではないかと思います。まずは先生方が元気でなければ、子どもたちへも十分な対応ができないと思いますし、また現場を支える先生方を育てていただくためにも、大事なことはないかと思っています。他の委員の方もおっしゃっていましたが、大人が子どもを守りすぎる、親が子どもを守りすぎるということが当たり前になってきて、子どもも親を頼りすぎていると感じています。ですので、それらに対応していくためのシステムを構築し、先生たちの精神的な負担を和らげていくというのもこれからの教育の現場には、とても大事なことはないかと思っています。

<飯泉知事>

多様性ということへの学校の先生方の対応の問題、経験不足という話、おっしゃるとおりですね。なかなか若い先生方にそこまでという、そして保護者の皆様の方が年が上ということもかなりありますので、逆に先ほどインターンシップとして、若い学生さんたちに来ていただくというのもあるんですが、今介護の現場に徳島独自の制度として県版介護助手制度、つまり介護周辺業務をやっていただく。OJT研修を受けて、その施設でいいということであれば、4月から雇われると。今、ジャパンスタードになったんですけども、同世代の人たちであれば話もしやすいというのがありますし、また、一旦退職をされて、その後またおいでいただくというやり方も一つあると思いますし、様々な人材を教育の場を集めてくるというのが一つあるかと思っています。

そして、今日は出てこなかった保護者の皆様への対応、ここは実は我々も大きな悩みの部分でして、テレビドラマではスクールロイヤーとか、こうしたものがドラマ化されるぐらい、実は多くの課題が全国で出ているんですね。

これも両サイドからお話を聞きますと、かつてはお母様方の学歴と、学校の先生の学歴とに隠然と差があった。学校の先生になる場合には、例えば学士だけではなくて、マスターになっている人もかなりおられる。逆にお母様方が高卒の人、短大卒の人が非常に多かったということがあって、先生のおっしゃることならばということで、教育はお任せと、こうきたんですね。ところが、昨今では逆転する場合がままある、お母様が逆にドクターだ

という場合があったりして、そういう基本的なところでもって、逆に保護者の皆様方から、あなたの教育がなっていないということを言われてしまうという御意見があるんです。

もう一つあるのは、先生方に教育に一生懸命頑張っていただくと。そういう保護者への対応が重要な場面はあるので、全くノータッチっていうのは課題があるのですが、今、例えばスクールクラークみたいな形で、医療クラークというのは制度化してきているんですけども、ドクターとか看護師が全部やるのではなくて、事務的なことを知識のある人たちがやると、スクールロイヤーもその一環ということなんですけども、こうしたことをいかに導入していくのか、これも働き方改革につながる教育の課題ということでもあります。

ただ、また新しい課題が出てきています。NHKのニュース7を見ていた時に、実は、保護者の若いお母さんたちが、学校とは限らない、保育所とか幼稚園の場面なのですが、あなた教育がなっていないわよと先生方に言われてしまうと。お母さんとしての役割を果たさないとと言われると。また、自分の親御さんにも言われると。私はお母さんになるための教育を受けてないというのも、お母さんたちの生の言葉で出ていたんですね。こうしたことが新たな課題としてクローズアップされていると。こうした点もどのように考えていくのか、これがなかなか難しい。

そうしないと結果として教育現場に加重負担がかかるんですね。本来は家庭教育でしっかり学ばないといけないものを学校教育でそれをやってくれと、いわゆるしつけとかですね。逆にお母さんの教育もやってくれという新たな課題も出ているというのが昨日のニュース7で出ていたところですので、我々もそうしたアップトゥーデイトの状況を踏まえながら、教育現場がどうあるべきか、これまでだけの分ではなくてやはり考えていかなければならない大きな転換点、しかしその意味では、来年の4月、こども家庭庁がスタートを切り、新たな予算体系が加わってくる。今までの頂いている点についても、しっかりと我々でしたら全国知事会、あるいは市町村の皆さんもおられますので、市長会、町村会、こうした形で国とともに新たな形を作り上げていく大きな転換点にさしかかっていると考えています。それでは、島委員さん、お願いします。

<島委員>

教育委員をしております、株式会社シケンの社長の島です。私は中小企業家同友会という経営者団体の代表もしておりますので、経済界にまつわるような話をさせていただきますと、中小企業家同友会の中でも、教育に関する話を経営者の皆さんとよくしているのですが、地元に残って残ってもらえる施策としてのキャリア教育の充実というのは欠かせないと思いますし、リモートインターンシップなどの新しいやり方も出てきていますし、コミュニティ・スクールにも経済人が入っていますので、学校と相談しながら作り上げていくことが必要かと思えます。

また、大学入試制度も考え直さないといけないと思いますが、暗記型からの転換と申しますが、知識も必要ですが、今は実社会では検索すれば分かることも多いです。ただ一方で答えのない課題を考えていかなければならない場面が仕事をしていく上では多いですから、思考力を高めていくためにもアクティブラーニング、先生からの一方的な講義形式ではなく、生徒が能動的に考え学習する教育方法ですが、具体的にはグループディスカッションとかディベートとか、そうしたことをする時間も持っていただければと思います。

コミュニケーション能力重視の英語教育もグローバル社会で活躍するためには欠かせないと思います。ウクライナの方も大体英語で答えていました。8年間も勉強してどうして日本人は英語をそんなに話せないのかと外国人に言われないようにしていきたいと思いません。

また、今日の新聞に、発達障がいに関する文科省の調査結果が載っていましたが、最近職場においても、大人になって発達障がいということが分かる方がいらっしやいます。調査結果では、小中高と進むにつれて、認知割合が減っていますが、これは先生が認知しているかどうかの割合と出ていましたので、高校での認知割合の低さは特別支援学校へ行っている生徒が多いということも要因だとは思いますが、高校の先生方にも、もっと発達障がいの特性を理解していただくことが必要かと思えます。学校と職場、社会が協力して、すべての人が生きやすい環境を作っていかなければならないのだと思えます。

1人1台端末に関しては、こういうものを使いながら仕事をしていくのが当たり前になっていますので、次の更新時には、機材の統一化とか、県で一括購入を考えていただくとか、いろいろ工夫が必要かと思えます。また、以前意見がございましたが、Wi-Fi環境の整備などについてもぜひお願いしたいと思えます。

最後に本質的なことにはなりますが、すべては子どもの自己肯定感を高めていただくことが、すべての取組のベースにないといけないと思えます。何をやるにしてもこれは大元になってくるのではないかと思えます。

<飯泉知事>

インターンシップの在り方については、中小企業家同友会としても、新機軸を、あるいは受け入れについても前向きによろしくお願ひしたいと思えます。また、子どもの自己肯定感、成功体験とおっしゃった委員もおられました、ぜひそうしたものが必要だという御意見いただきました。それでは、菊池委員お願ひします。

<菊池委員>

教育委員をしております菊池と申します。よろしくお願ひします。社会現象になっております引きこもりの話を聞く機会がありまして、今全国で100万人を突破して、115万人あまりの方が引きこもりされているという話を聞きました。先ほど不登校の話がありましたが、不登校の児童数、学生数も年々増えているということで、いずれも非常に心配しているところです。教育現場では、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーの皆さんには非常に頑張っただいただいているとは思いますが、現在の体制だけで不登校が改善されていくのかというのは、まだまだ考える余地があるのではないかと思っています。全国的な数字なので、徳島だけに見られる状況というわけではないのですが、だからといってそのままの状態にしておくと、数字が悪くなっていくのではと心配しているところです。

また、先程来お話があったインターンシップの話ですが、我々ビルメンテナンス業界におきましても、特別支援学校の生徒さん方の就労実習を受けさせていただいておりますが、我々としても、生徒さん方の学ぼうとする意欲や、喜びを感じられるのは大きなメリットだと思っています。普通科の生徒さんや専門学科の生徒さんのインターンシップをぜひと

も地元企業で経験し、社会をいろいろと勉強していただく、こういう機会をできれば県が窓口となって企業を公募しマッチングという仕組みを作っていただきますと、社会に出るからの挫折も減っていくのではないかと考えております。難しい問題もあると思うのですが、先ほどの115万人の数字は、全国の18歳の人口とほぼ同じ数字だと聞くと、本当に心配なことだと思います。まず、小さなところからでも頑張っていていただいて、不登校を減らしていくことができると考えております。

<飯泉知事>

若い皆さん方、就労して3年でやめるというのが日本の現状なんですね。先ほどの成功体験とか、あるいは自己肯定感、こうしたもののためには、自信を持ってもらう、この仕事好きなんだという体験を早い段階でしてもらうというのがやはり重要、実学と言いますか、そうした点、これはもう日本の今後の教育の在り方、就業関係の在り方を変えていかなければならない大きな転換点だと思いますので、みなと高等学園をはじめ徳島ビルメンテナンス協会の皆様には御協力をしていただいておりますが、これからもそうした点、ぜひよろしくお願いいたします。それでは、教育長、お願いします。

<榑教育長>

まずは、様々な御意見をいただき、ありがとうございました。今、メモ程度ですが、委員の皆様にはいただきましたキーワードを書き連ねているのですが、それだけで大きなものができるのではないかと思います。これから議論を深めていって、いいものを作っていかなければならないのですが、本当にたくさんものがあるのだと改めて感じているところです。子どもたち、それから教員、学校、それぞれの切り口でいろんな課題、提案、御意見をいただきました。それをしっかり踏まえて参考にしていきたいと思っております。

現在の大綱ですが、令和元年の8月にできまして、その半年後にはコロナ禍と言われる状況に突入しています。今の教育大綱は、「未知の世界に果敢に挑戦する、夢と志あふれる『人財』の育成」ということを目指して行っているのですが、まさにコロナ禍というのは、本当に先の見えない手探り状態の中で、子どもたちをどうやって育てていくのかというのが問われた状態だったと思っております。

新型コロナウイルス、今も戦いは続いておまして、今年の漢字は「戦」という字だったのですが、学校の中では先生方も含めて我慢もしてもらって苦しい思いもさせてしまったのですが、本当によく頑張ってくれたなと感謝しております。子どもたち、先生方の頑張りがなければここまで来ていなかったというのは、本当に実感しているところでございます。

子どもたちの学びなのですが、令和2年度については、皆様も御承知のとおり、二か月半にも及ぶ全国一斉の臨時休校ということで、令和2年度は子どもたちの学びをどうやって取り返すのかと、マイナスからプラスマイナスゼロにどうやって持っていったらいいのか一生懸命考えた一年だったと思っております。夏休みに先生方に御努力いただいて補習をして、何とか子どもたちが一年で学ばなければならない教育課程をきっちり仕上げた次の学年に送った一年でした。

令和3年度に入って、WITHコロナが本格化してきたのですが、飯泉知事に強力に背

中を押していただきまして、1人1台端末を本県では高等学校や特別支援学校の高等部にまで整備していただきました。先ほどからDXの話も出るのですが、1人1台端末をどうやって使いこなしていくのか、言葉は悪いですが、「使い倒していく」というのを合言葉にやってきたところなんです。環境整備等、不具合もあって迷惑もおかけしたのですが、確実に子どもたちの学びというのは変わってきていると思います。高等学校におきましては、電子黒板は必須という声を現場からいただいておりますので、これからそういう機材を使って何をしていくのかというのが問われる、それをしっかりやっていきたいと思っています。

子どもたちは、コロナ禍になって、新たな時代に入ったのですが、本当にチャレンジすることに頑張っていると思います。加渡先生にもお世話になっているエシカル甲子園もありますし、学校の枠を超えてクラウドファンディング等を実施して、大学生とも連携しながら地域を元気にしていく、そういう取組にもチャレンジが始まっています。

また、今年度は、全国高校総体公開演技、総合開会式等、秋篠宮皇嗣同妃両殿下にも本当に立派な大会だったとお褒めいただくような高校生の頑張りがありました。さらに、新聞でも皆様方の目にすることが増えてきたと思うのですが、特別支援学校の子どもたち、支えられる側から、支える方もできるということを実践できている地域貢献活動等を、教育大綱や教育振興計画に則ってやってこれたと思います。

一方、不登校、いじめ等は、かなりの人数が出ておりますので、そういった問題に関しても解決しなければいけないと思っています。これから、新しい教育大綱などの策定に取り組んでいくわけですが、教育長に就任して、校長先生方、子どもたちに言ってきたのは、自ら学び、自ら考え、行動して、発信して、工夫して、シェアしていく。たくさんあるのですが、そういうことを子どもたちにも学校の教員にもやってもらう、学校の中でそれができるように努力してもらうということをお願いしてきたつもりですので、それらを次に生かしていけたらと思います。

話かわって、もう少しでワールドカップの決勝があるのですが、日本代表はよく頑張りました。その際、解説の人などが言っていた言葉が耳に残っているのですが、「新しい景色」を見に行く。子供たちには今努力をして、頑張っ、次の新しい景色を見に行くチャレンジをしてほしいと思っています。それをしっかり教員とか学校とか、教育委員会が後押しできるような施策を考えてやっていきたい。概念的な話で申し訳ないのですが、チャレンジをしっかり応援して、子どもたちが次のステップに駆け上がって、自分たちが新しい景色を見ることができたら、さらにもう一段、もう一段と進んでいけると思うので、そういう教育をやっていききたいと思っています。

<飯泉知事>

ありがとうございます。教育振興審議会会長代行、加渡先生よろしく願いいたします。

<加渡副会長>

四国大学の加渡でございます。先生方皆様の御意見を拝聴しながら、今教育に求められるのは、大きく二つではないかと感じております。一つは持続可能な地域の担い手をしっかり育てていくこと、二つ目は、学ぶ側、教える側それぞれが一人ひとりのウェルビーイ

ングを実現することだろうと考えます。そのためには、誰一人取り残さない教育現場の整備が必要ですが、それを支えるのがDXであり、GXであり、またグローバル化であると考えます。つまり、どこにいても自分らしい学びを選択、探求できる徳島モデルをジャパスタンダードとして日本全体に発信できるのが、これから策定しようとする新たな徳島教育大綱であると信じております。

そこで2点だけ簡単に申し上げたいと思います。1点目は、人生100年時代における生涯を通じた学びです。今の子どもたちは、また、これから生まれてくる子どもたちは、この21世紀の最後を見届けて22世紀の徳島につないでいく、そういった人材です。今の日本は学ぶ時代、働く時代、そして退職して、リタイアメントする時代、この三つのステージが人生設計と教育の基本となっております。しかしながら、人生100年となりますと、学ぶこと、働くこと、自分の課題を探究すること、これを自由に行ったり来たりできる、つまり学びとキャリアのポータビリティが求められることとなります。いわば人生のマルチステージ化ですが、この実現がもうすぐここに来ているのではないかと思いますし、これがリカレントからリスクリングへの流れとなっております。つまり、リスクリングは産業界だけではなくて、地域の自立化、あるいは伝統産業の持続可能性を担う原動力となっていくと考えています。

2点目は、未来へのマイルストーンです。2019年、G20消費者政策国際会合のレガシーが脈々と受け継がれて、徳島県はSDGs消費者教育の先進県を標榜しております。また、これからはとくしまGXスクールの全県展開も控えていると伺っています。そして、さらにその先、2025年大阪・関西万博、テーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」です。徳島は、徳島「まるごとパビリオン」として出展もいたします。このレガシーを教育にしっかりと生かし、徳島が徳島であり続けるために、愛する徳島を誇りに思っ、県民一人ひとりが語ることができる、そんな素養を培うための教育大綱でありたいと思っています。新しい教育大綱は、徳島を学び、徳島を愛し、そして徳島の未来を創るために最も大切な課題である教育のグランドデザインを未来志向の新たな羅針盤として創っていく、そういった協議の場に参加させていただきますことに感謝申し上げます、私の意見とさせていただきます。ありがとうございました。

<飯泉知事>

加渡会長代行、ありがとうございました。今日いただきました御意見につきましては、徳島教育大綱にしっかりと活かしていくとともに、教育振興計画の策定については、教育委員の皆さん方の御意見も含めまして、今後御審議を前向きに進めていただければと思います。それではマイクを司会の方に返させていただきます。

<村山部長>

ありがとうございました。以上をもちまして本日の会議を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。